

# 口絵解説

小澤 弘\*

本報告書『芝地域を考える―愛宕山・増上寺・芝神明』を構成するにあたり、テーマに関連する地域資料を口絵として編集し利用者の便を図った。取り上げた資料は、主として愛宕山・増上寺・芝神明をテーマとしたものを対象とした。資料としては、まず「江戸図屏風」などの江戸の俯瞰図に描かれた芝地域の描写、『猿猴庵江戸循覧記』のような挿絵入り江戸見聞記、『江戸名所図会』に代表される地誌類、「江戸大絵図」「江戸切絵図」などの地図上に表された芝地域、そして「愛宕山」「増上寺」「芝神明」を画題とした錦絵、新版画、石版画、古写真、また外国で刊行された書物の挿絵などである。なお資料は、他機関に掲載協力を得た作品以外は、すべて東京都江戸東京博物館の所蔵品であり、キャプション末尾の8桁の番号は館蔵資料番号である。また本稿で資料名後【 】内番号は、口絵通し番号である。

都市図屏風に描かれた芝地域としては、寛永期の都市・江戸を画題とした出光本「江戸名所図屏風」【1】と歴博本「江戸図屏風」【2】、江戸博本「江戸絵図屏風」【3・表紙】がある。建設途上の武都・江戸を表現した出光本は、増上寺の境内には瓦葺の本堂・山門・鐘楼・五重塔が象徴的に描かれ、境内には説教語りの雑芸と勧進聖や参詣者の姿がある。歴博本では、徳川将軍家二代秀忠の御霊屋である台徳院殿御廟所・同仏殿、崇源院殿（秀忠御台所）御霊屋、東照大権現宮および本堂などの伽藍を三代家光の仏殿参詣の儀礼とともに詳細に表現している。愛宕山は、出光本ではすやり霞に中腹から上の石段の男坂、ゆるやかな女坂と山門・社殿を描き、歴博本では鳥居に接した石段の男坂、右手にゆるやかな女坂、山上に社殿を描く。芝神明社は、出光本・歴博本とも描かれていない。両本ともに芝地域の季節は紅葉の秋である。両本に比べ、江戸博本「江戸絵図屏風」は、地図の上にランドマークの建造物、地形的特徴、河川や橋などを絵画化した作品で、芝地域は愛宕山・増上寺・芝神明の俯瞰図となっている。

近世後期の江戸図としては、鋏形紹真画「江戸一目図屏風」の原図となった同人画の享和3年（1803）刊の「江戸名所之絵（江戸鳥瞰図）」【5・6】には、「芝」「ゾウ上ジ」「シンメイ」「アタゴ」の書き込みとともに、朱色の増上寺の山門・本堂・鐘楼・五重塔など、愛宕社は石段を真正面に、芝神明は千木をもった社を描き、簡略ながらイメージを具象化している。天保期頃の景観と推定される厚本市本「江戸図屏風」【4】では、「三縁山増上寺」はすやり霞で境内を曖昧にした上で朱塗りの山門と五重塔のみを示し、「芝神明宮」は鳥居に社殿、境内には宮地芝居の小屋や幟が描かれている。「アタゴ」は地図を下地としているせいか少し離れた高台の森として描き、鳥居、男坂の石段、山上の社殿が見られる。

地誌や記録挿絵に見られる芝地域については、尾張藩士高力種信（猿猴庵）が文政11年（1828）に絵

---

\* 東京都江戸東京博物館都市歴史研究室長

入りで記録した『猿猴庵江戸循覧記』の中から「増上寺の大塔・赤羽・有馬家の火之見」「芝愛宕茶店眺望」「芝三嶋町」【7～9】を所載した。江戸後期の地誌では、長谷川雪旦画『江戸名所図会』【22～26】や広重画『狂歌江都名所図会』【27～30】を、そして江戸名所五十景を描いた摺物の蕙斎画「江都名所図会」【31】から関連する名所図を取り上げた。

江戸の地図に表現された芝地域については、寛文6年（1666）の「新板武州江戸之図」をはじめとした芝地域の部分図【16～19】、江戸切絵図の嘉永2年（1849）刊の近江屋版と嘉永5年（1852）刊の尾張屋版の芝地域図【20・21】を収録し、編年順に推移する地域情報を比較提示した。

さて、シンポジウムの報告者が提示した絵画資料としては、『猿猴庵江戸循覧記』【9】のほか、国丸画「新板浮絵江戸芝神明之図」【10】、芝神明社の生姜市を描いた英泉画「浮世美人十二箇月 九月 芝神明せうが市」【11】、江戸七太夫を描く二代清倍画「江戸七太夫と市川源之助」【12】、土弓（矢場）の様子を描いた挿絵の式亭三馬著・歌川豊国画『絵本時世粧』【13】を掲載した。また参考として、広重画「江戸高名会亭尽 芝新明社内（車轍楼）」【14】と、文化2年（1805）に起きた芝神明境内での町火消しと角力の争い（め組の喧嘩）については、この事件が題材となった芝居「神明恵和合取組」が明治23年（1890）新富座で上演されたが、その時に刊行された三代国貞画「神明恵和合取組」【15】も所収した。

浮世絵の名所絵としては、政演画「愛宕山之眺望」【32】、秀麿画「江戸八景の内 愛宕秋月」【33】、英泉画「今様美人拾二景 しんきそう 愛宕山」【34】、広重最晩年の傑作「名所江戸百景」から「増上寺塔赤羽根」など【35～38】、広重の百景に触発されて刊行されたと思われる三代豊国と二代国久の美人画と名所絵の合作「江戸名所百人美女」から「芝あたご」など【39～42】、浮絵表現の豊国画「浮絵芝三縁山増上寺之図」【43】、北斎画「新板浮絵芝愛宕山遠見之図」【44】、北寿画「東都芝愛宕山遠望品川海」【46】、そして泥絵の「芝愛宕山」【45】、広重の「東都名所」シリーズからは「芝神明宮」【47】と「芝愛宕山之図」【51】、寺社の行事と参詣で賑わう様子については、英泉画「東都名所尽 芝神明宮祭礼生姜市之景」【48】、芝神明の出開帳を描いた国芳画「芝神明宮境内にて六波羅観世音開帳参詣群集の図」【49】、幕末期の見立絵である芳盛画「愛宕参詣群集之図」【50】を所収し、江戸後期の賑わいの地としての芝地域の情景を紹介した。これらの浮世絵の中には、芝神明前の地本問屋である和泉屋市兵衛（甘泉堂）や佐野屋喜兵衛（喜鶴堂）版行の作品が多く含まれている。

明治の錦絵では、小林清親の「武蔵百景之内 芝増上寺雪中」【57】、井上安治の「東京真画名所図解」から「愛宕山」「芝増上寺」【52・56】、三代広重画「東京開化三十六景」から「芝あたご山の雪」「芝増上寺内円山ノ景」【54・55】と「東京開華名所図絵之内 芝あたご下」【65】、新たな展開を遂げる愛宕山の風景は、玉英画「東京愛宕山上愛宕館之図」【62】、「東京名所 愛宕山愛宕塔」【63】、昇斎一景画「東京名所四十八景 愛宕やま」【64】を取り上げた。

また、大正新版画の先駆者である川瀬巴水の「増上寺の雪」【58】、小泉癸巳男の大東京百図シリーズから「あたごやまのJOAK」「芝公園 塔と梅林」【80・81】、そして石版画作品では、織田一麿の「東京風景」から「愛宕山」【78】、渡辺忠久の「東京名所 愛宕山」【60】を所収した。

写真資料としては、ベアト撮影の著名な写真「愛宕山からみた江戸のパノラマ」【59】、古写真では「増上寺五百灯籠」など【70～73】、また絵葉書として「愛宕山の眺望」など【61・74～77・79】を所

収し、当時の芝地域の実景を紹介した。

『風俗画報』の特別編輯『新撰東京名所図会』からは、松谷画の挿絵「芝愛宕公園之図」「芝愛宕下薬師堂縁日の図」【66・67】を取り上げ、アンペール著『幕末日本図絵』から「江戸将軍の寺院（増上寺）内部」【68】、そして館蔵の寛永10年（1633）の「増上寺台徳院様御霊屋々内装飾指示原図」【73】を掲載して、芝地域を考察する上での一助となることを試みた。

末尾ながら、掲載を快諾された国立歴史民俗博物館、東洋文庫、東京都写真美術館、出光美術館、平木浮世絵財団、厚木市郷土資料館、港区立港郷土資料館、そしてボストン美術館に対し感謝の意を表します。